OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究
Author(s)	巴雅尔都楞
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55700
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	（巴雅尔都楞）
論文題名	日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究

本論文は、日本語とモンゴル語の指示詞の体系的対照研究である。本論文の目的は、日本語とモンゴル語の指示詞の相違点と共通点を明らかにすると共に、指示詞の一般な法則、定義を明確にすることである。

従来の指示詞の対照研究のように言語間の指示詞同士の対応関係に重点を置くのではなく、同じ理論的枠組みに基づきつつ日本語とモンゴル語の指示詞に対して体系的な分析を行った。

その結果、日本語とモンゴル語の指示詞の共通点として、まず、話し手が指示対象に注意し、焦点化するという働きがあることがわかった。また、距離や見かけ上の大きさなどは、語用論的な効果であり、通常は常に無標の指示詞が優先され、対比の意味合いが生じたときには、ほかの指示詞が使用される。

相違点としては、日本語では、聞き手を基準とした聞き手領域のソと話し手の“here-space”を基準としたソ$_2$が存在する。また、日本語のア系列指示詞は、聞き手領域のものを指すことができない。それに対しモンゴル語では、te系列指示詞で聞き手のものを指すことができる。すなわち、話し手に聞き手が境界物として認識された場合はte系列指示詞が使用される。

以下には、各章ごとの分析をまとめる。

第1章では、本論文における研究の背景、動機、目的や研究方法・理論的枠組みなどを紹介し、日本語とモンゴル語の指示詞の形態論的特徴と統語論的特徴を概観した。

第2章では、日本語とモンゴル語の指示詞の先行研究を古代語と現代語にわけて検討した。また、ラオ語指示詞を対象としたEnfield（2003、2009）をとりあげた。その結果、日本語指示詞とモンゴル指示詞、また古代語研究と現代語研究に共通して、距離という概念が用いられることが明らかになった。しかし、ここでは、距離による説明には限界があることを示した。

また、現代日本語指示詞研究において、ソ系列指示詞に関する解釈に議論が集中していることがわかった。それは、ソ系列指示詞には聞き手領域を指す用法と中距離を指す用法と曖昧用法が存在するため、統一的な説明が困難だったと思われる。

第3章では、注意と対比という二つの概念を用いて、日本語指示詞の意味記述をおこなった。人間の基本的な能力の一つである「注意概念」と「対比」と「基準点」を用いて、日本語指示詞の意味記述を行うと次の通りである。

コ　　注意の焦点
ソ　　注意の焦点　　基準点（対比）
ア　　注意の焦点　　対比

そして、この記述に基づいて、日本語指示詞を直示用法と非直示用法に分けて分析した。その結果、日本語指示詞においても注意と対比は非常に重要な概念であることが確認できた。また、実例の分析から距離区分説の限界を指摘し、コ系列指示詞とア系列指示詞の使い分けは距離によるものではないことを示した。つまり、コ系列指示詞は無標で、対比の意味合いが生まれない限り、自由に使用される。一方で、直示センターとの比較より、対比の意味合いが生じた場合は、ア指示詞が使用されることが明らかになった。また、ア系列の使用には、聞き手が一切係らないことを合わせて主張した。

また、日本語指示詞の議論の焦点であるソ系列指示詞に対しても定義を行った。すなわち、いわゆる聞き手領域のソと中距離のソについて検討し、それらの違いは基準点の違いであることを示した。その上で、聞き手領域のソとソ$_2$（中距離のソ）を、歴史的研究に基づきつつ、基準点という概念を用いて統一的に説明することができた。

第4章では、他言語の指示詞研究の成果をモンゴル語の指示詞分析に生かすということを念頭におきながら、日本語指示詞の研究史を概観し、モンゴル語指示詞研究と対照した。その結果、モンゴル語指示詞研究の現状を以下の三点にまとめることができた。

一つ目は、距離区分説が圧倒的な影響力をもっており、それを疑う研究者は少ない。しかし、距離区分説の限界性を示す事例は日常言語生活の中で数多く存在する。これは日本語でもモンゴル語でも同様である。二つ目は、モンゴル語の先行研究について言及したように、指示詞、つまりものや事物などを指し示すことばという概念に対する認識が足りない。未だに、指示詞を、名詞を代行する代詞とする理解が強く残っている。三つ目は、モンゴル語指示詞の用法においては、直示用法や非直示用法を区別し、体系的に分析を行った研究は管見の限り、まだ存在しない。

このほか、Enfield（2003、2009）のラオ語指示詞の記述で用いられた方法論も参照し、指示詞の中核的な意味は、「指し示す」ことであり、距離の遠近を示すものではないとすることを確認した。しかし、Enfield（2009）も、方向と距離によって産出される「位置」という概念に留まっている点で、指示詞の定義の上で距離区分説とは一線をかくすことができたとは言えないとする批判を加えた。

その上で、本論文ではEnfield（2009）を参考にしながらも、モンゴル語指示詞の意味記述から距離という概念を完全に排除し、モンゴル語指示詞の意味記述を以下のように行った。

e　　注意の焦点

te　　注意の焦点　　対比

そして、このようなモンゴル語指示詞の意味記述を通して、特に指示詞の語彙的意味と「距離」概念の直接的な結びつきを排除し、距離や見た目上の大きさなどによる指示詞の使い分けは語用論的効果から生じることを主張した。具体的には、モンゴル語に強く見られる「境界性」の効果をはじめとして、語指示詞の非直示用法、人称用法、「ところ化」用法などに触れた。

第5章では、注意概念を用いて、モンゴル語のnaga-、caga-の指示機能と意味記述を行った。

naga-、caga-の意味記述は、次の通りである。

naga-：基準点　注意の焦点（基準点より話し手の側の空間・方向）

caga-：基準点　注意の焦点（基準点より向こうの空間・方向）

まず、naga-、caga-は相対名詞であり、基準点の付近の空間位置や方向を指し示すことができる指示機能があること。次に、naga-、caga-につく接辞は空間位置を細かく指定できることがわかった。

そして、naga-、caga-と「手前、向こう」の比較において、基準点になりうるものは多様であり、基準物が方向性をもつかどうかは、naga-、caga-の使用に影響を与えないのに対し、「手前、向こう」はそれに影響されることがわかった。さらに、naga-、caga-は相対名詞でありながら、一般的な相対名詞と異なる点があることなどがわかった。

さらに、今回のnaga-、caga-の分析を通して、一般的な相対名詞にも注意概念を導入した、意味記述の可能性を示すことができた。また、われわれが指示を行う際、卓立性の高いものを見つけて、そこを目印（つまり注意を向ける）に聞き手に情報を伝えることはコミュニケーションをする上で、聞き手の負担を減らすことに繋がる。

第6章では、モンゴル語のönöと日本語のアノとの対照である。

日本語の指示詞はコ・ソ・アの三系列を成しているのに対し、モンゴル語はe-系とte-系の二系列である。大まかにいうと、モンゴル語のe-系は日本語のコ系に対応し、モンゴル語のte-系は日本語のソ系とア系に対応する。しかし、日本語ではア系列で指し示せるが、モンゴル語のte-系に対応する表現がない場合がある。そのとき、モンゴル語では、önöが使用される。

まずモンゴル語のönöの意味と機能が以下のようであることを確認した。

意味：時間を指すときは今、現在の意味であり、それ以外のときは、世間によく知られていること、あるいは話し手と聞き手に了解されていることを表す、いわゆる「周知」の意味である。

機能：名詞を修飾し、人、物、場所、時間などを指し示すことができる。

次に、önöとアノの対照分析を通じて、önöは普通、現場指示には用いられないのに対し、アノには、直示用法がある。また、önöとアノは共に記憶指示用法があり、固有名詞を修飾するときは、önöとアノには対応関係があるといえる。一方、普通名詞を修飾するときは、人、事、場所には対応関係が見られるが、時間に関しては、対応関係は見られないということを明らかにした。

第7章は、まとめと今後の課題である。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　巴雅尔都楞　）		
	（職）	氏　　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　教授　金水 敏 副 査　大阪大学　教授　岡島昭浩 副 査　大阪大学　准教授　矢田 勉	

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究

学位申請者　巴雅尔都楞

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　金水 敏

副査　大阪大学教授　　岡島昭浩

副査　大阪大学准教授　矢田 勉

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語とモンゴル語の指示詞の体系的な対照研究をめざすものである。本論文の目的は、日本語とモンゴル語の指示詞の相違点と共通点を明らかにするとともに、指示詞の一般的・普遍的な性質から、両言語の指示詞を照らし返そうとするものである。個別の用法の対応関係を列挙するというよりは、同一の理論的枠組みに基づいて両言語の指示詞を体系的に捉えることを目指す。

本論文の分析の結果、日本語とモンゴル語の指示詞の共通点として、まず話し手が指示対象に注意し、焦点化するという働きを基盤とすることが分かった。また、距離的な情報や、見かけ上の大きさが指示詞の選択に与える影響などは、語用論的な効果として現れるものであり、指示詞の意味論的な基盤とこれら語用論的な効果は区別されなければならない。両言語の指示詞の使用は、まず無標の指示詞が選ばれることを基本とし、それと対比的な文脈が与えられた場合にのみ有標の指示詞が選ばれる。

相違点としては、日本語としては無標のコ系列、有標のア系列の他に第 3 の指示詞ソ系列が用いられる点である。ソ系列はいわゆる聞き手領域のソと中距離のソがあると言われるが、これも語用論的な選択で説明されるべきである。例えば聞き手領域のソは、ア系列が聞き手領域を指し示すことが意味論的に不可であることから導かれる。これに対し、モンゴル語では、有標の te 系列指示詞は聞き手領域もさすことができるという点で大きくことなる。

以下に、各章ごとの内容を列挙する。

第 1 章では、本研究における背景、動機、目的、研究方法、理論的枠組みを紹介し、日本語とモンゴル語の指示詞の形態論的特徴と統語論的特徴を概観する。

第 2 章では、日本語とモンゴル語の指示詞についての先行研究を概観する。

第 3 章では、「注意」「対比」「基準点」という 3 つの概念で日本語指示詞の意味論的な記述が可能となることを示す。すなわち、下記のようになる。

コ　　注意の焦点

ソ　　注意の焦点　　基準点（対比）

ア　　注意の焦点　　対比

この枠組みに基づいて、日本語指示詞の直示用法と非直示用法を説明する。

第 4 章では、Enfield (2009)、金水 (2015) 等を援用しながら、モンゴル語指示詞の意味記述から距離という概念を排除することを主張する。具体的なモンゴル語の指示詞の意味記述は次のようになる。

e　　注意の焦点

te　　注意の焦点　　対比

この意味的基盤に基づき、距離や見た目の大きさ、またモンゴル語に強く表れる境界性等が指示詞の選択に影響を与えるメカニズムを分析する。さらに、指示詞の人称用法、「ところ化」用法にも触れる。

第 5 章では、注意概念を用いて、モンゴル語の naga-、caga-の指示機能と意味記述を行う。

第 6 章では、モンゴル語の önö の対照を行う。

第 7 章では、まとめと今後の課題を述べる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、トマセロ、ディーゼルらの注意概念や、エンフィールドのラオ語指示詞の分析、金水の日本語指示詞の分析等を積極的に取り入れ、大胆かつ明解な指示詞研究の枠組みを示した。すなわち、指示詞の基盤には注意があり、指示詞の使い分けは無標の指示詞と有標の指示詞の語用論的な選択によるもので、距離や見かけの大きさが選択に影響を与えるのは指示詞の意味論ではなく、語用論的な効果に過ぎない、と切り込んだ。これは指示詞研究の潮流を敏感に捉えて、さらにその流れを推し進めようとするものであり、新規性に富んだ試みと評価できる。またその結果、日本語との対照も鮮やかに指し示すことができている。

さらに指示詞研究の方法論としても、著者自らが撮影した自然会話のビデオ映像を駆使するなど、テクノロジーの応用という点でも注目に値する研究である。

結論としては、モンゴル語の指示詞はラオ語に似て、いわゆる近称の指示詞 e 系列を無標とし、いわゆる遠称の te 系列を有標とするというものであるが、さらに「境界性」というモンゴル語で強く働く指標を取り出した点も興味深い。今後は、この指標が他の言語でどの程度有効に働くか、検証を進めることが期待できる。

また、ここまで純粋に指示詞の意味論を抽出できた背景には、従来指示詞の仲間と捉えられてきた naga-、caga-や önö を指示詞から切り離し、あらためてそれらの意味論・語用論を指示詞との関連から説き明かした点が無視できない。これも、日本語の指示詞研究の方法論を深く学んできた著者ならではの視点であり、モンゴル語指示詞研究を大きく進展させた結果となった。

とはいえ、問題点も散見される。論文全体の構成が十分練られておらず、首尾が整わない印象を読者に与える。また、用語の提示はその説明が往々にして唐突かつ淡泊で、この分野になじまない読者には大いに不親切である。また、理論的枠組みからの対照に重点があるとはいえ、対照研究を謳っている以上、両言語の具体的な用例の対比を丹念に示す章段があってもよかったはずである。ノンネイティブゆえの日本語表現の拙さが理解を遠ざけている面もないとは言えない。本当に距離概念が意味論として不必要であるのかという点で読者を完全に説得するためには、用例の追加も含めた説明の強化が望まれる。多くの研究者に参照される論文とするためには、さらなる洗練がどうしても必要であろう。

このように、課題や瑕疵を残すものではあるが、本論文が到達しえた成果を疑わせるものではない。本論文の公開審査と最終試験を去る平成 28 年 1 月 28 日に実施したことを付記し、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定するものである。